

## 語り継がれる「濡れ衣」説話：博多における「濡れ衣」説話・続考

森, 誠子  
九州産業大学：専任講師

<https://doi.org/10.15017/26936>

---

出版情報：語文研究. 112, pp.22-35, 2011-12-26. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 語り継がれる「濡れ衣」説話

— 博多における「濡れ衣」説話・続考 —

森 誠 子

## 一、はじめに

「濡れ衣」説話は、中世の古典注釈書や經典の談義注釈書、説話集、謡曲などに散見され広く享受されてきた。本説話は、大島由紀夫氏により、その生成及び伝承の経路が明らかとなった。<sup>(注1)</sup> また氏は、近世期における「濡れ衣」説話のもう一つの展開として、古典注釈の分野では「ぬれぎぬ」という語を注釈するにあたり蒙昧の説として斥けられるようになりながら、特定のモノに結びつき一地方の伝説と化すという新たな展開を指摘する。具体的には、福岡・博多において、石堂川にある大きな石が、濡れ衣を着せて殺された娘の墓とされ、現在に語り継がれている。そして氏は、それが可能で

あった背景として、「濡れ衣」説話を記す古典注釈書の多くが舞台を筑前国としていたり、在地にこの説話を伝説として受け入れる何らかの素地があったからであろう」とする。

そこで別稿では、諸書に見える「濡れ衣」説話が、どうして石堂川にある大きな石に結びついていったのか、在地の伝説形成に着目しつつ考察を行った。<sup>(注2)</sup> しかしながらその後、博多における「濡れ衣」説話は、『石堂丸行状記』や博多七堂建立譚などと交響しながら、ゆるやかな変容を見せつつ、現代に至るまで伝承されている。そこで本稿では、在地に根付いた「濡れ衣」説話が、博多においてどのように変容し享受されてきたのか考察を行っていく。

## 二、博多における「濡れ衣」説話について

博多の地誌類の中で「濡れ衣」説話を記す最も古いものは、貝原益軒の『筑前名寄』（元禄四年成立、以下「名寄」と略す）である。それらをもとに黒田藩の事業として編纂された、『筑前国統風土記』（以下「統風土記」と略す）は、公的な性格を持つ信憑性の高い資料として、「筑前三大地誌」の筆頭に挙げられている。『統風土記』に記された内容は、『名寄』が最後に載せる『古今和歌集』や『後撰和歌集』に詠まれる濡れ衣に関する和歌を省く以外はほぼ同じである。そこで次に、『統風土記』所載の「濡れ衣」説話を掲げる。<sup>(注3)</sup>

### 濡衣

聖武天皇の御時、佐野近世と云人、筑前の守にて下りしに、京より具したる妻、国にて死けり。さて此国にある女を、妻としけり。先の妻のうめるむすめを、継母にくみて、いかにもして、此娘をうしなはんと思ひ、海人をかたらひて云、此暁来りていふべきやうは、京の娘君の此程夜なく我もとへましくつるが、つりきぬをぬすみておはしつるたべといへとて、色々の宝をとらせけ

る。海人暁来りて、かねて頼みしごとく、高らかに云ければ、父是を聞て大に怒り、行て見れば、むすめぬれたる衣を、引かづきてふせり。是は娘のね入たる時に、継母のさせたる也けり。父其たばかれる事をは知らで、たちまち娘を殺しける。さて次の年娘父の夢に見えて、二首の歌を詠しける。父夢覺て、娘の罪なき事をさとり、さて継母のしわざなりとて、妻を送りかへし、其身は出家して、肥前の松浦山に住けり。世に松浦上人とぞ云ける。それよりしてなき名をおひたるは、ぬれ衣きると云傳へ、歌にもよみ侍へる。其むすめの墓は、筥崎松原の西の橋際、博多の東、石堂口の川の東の側小池の内に入り。大なる石をしるしとせり。此所むかしは聖福寺の後、入海の中の小洲たりしとかや。父の夢に見し女のみける歌

ぬき、するそのたはかりのぬれ衣はなかきなき名の  
ためしなりけり

ぬれ衣の袖よりつたふなみたこそなき名をなかつた  
めしなりけれ

ぬれ衣をよめる後人の歌多けれど、いたつかはしければ  
しるさず。

このように、博多における「濡れ衣」説話は、現在に至るまで、必ずこの石堂川近くにある大きな石と結びつけられながら語り継がれている。そこで、『閩史筌蹄 筑前郷土史解題』<sup>(注5)</sup>などを参考に、管見に入った限りの「濡れ衣」説話を記した主な地誌類について、年代順に以下に掲げた。

〔筑前三大地誌〕

A 貝原益軒編『筑前国統風土記』

元禄元年（一六八八年）頃より編集開始。元禄一

〇年（一七〇三年）に黒田藩へ献上。

A 加藤一純・鷹取周成編『筑前国統風土記附録』

天明四年（一七八四年）頃より編集開始。寛政五

年（一七九三年）に黒田藩へ献上。

A 青柳種信編『筑前国統風土記拾遺』

文化十一年（一八一四年）より編集開始。

〔その他〕

A 元禄四（一六九八）年 貝原益軒『筑前名寄』

A 宝永二（一七〇五）年 安見有定『筑陽記』

A 宝永六（一七〇九）年 末永虚舟『筑前国名所記』

A 元文三（一七三三）年 熊本敬卿『博多古説拾遺』

\* 明和二（一七六五）年 津田元顧・元貴『石城志』

A 文政四（一八二一）年 奥村玉蘭編『筑前名所図会』

A 天保十二（一八四二）年 伊藤常足『太宰管内志』

\* 弘化二（一八四五）年 九州大学文学部蔵『博多之記』

論旨の都合上、『統風土記』と同様の記述内容であるものに「A」を付した。これによると、博多の地誌類に記される「濡れ衣」説話の内容は、ほぼ益軒が記した内容に準拠して記されていることがわかり、改めて益軒の記述の影響の大きさを感ぜさせられる。その一方で、\*で示したように、『石城志』や九州大学文学部蔵『博多之記』の記述内容等から、当時の博多では、益軒の記した「濡れ衣」説話以外の内容も含んで語られていたことを、窺い知ることができる。

### 三、『石城志』について

『石城志』<sup>(注6)</sup>は、凡例等により、黒田藩医津田元顧・元貴親子が、筑州に関する古記録のみならず、当時博多に伝わっていた伝承をも取り込み記したものであることがわかる。そこで、次に『石城志』巻五（佛事下）に所収される「濡れ衣」説話を掲げる（論旨の都合上、私にアルファベットと傍線を付した）。

古墳

濡衣

**A** 続風土記云、聖武天皇の御時、佐野近世といふ人、筑前の守にて下りしに京より具しける妻、此国にて死せり。  
(中略) 濡衣をよめる後人の歌多けれど、いたつがはしければしるさず。

**B** 今按、本州船師総司吉田重昌等が著せる江海風帆草に  
しるせるは、続風土記の説に少しく異也。云、濡衣といふ事は、昔、①筑前守平の定ふんといふ人の娘のありけるに、継母の讒にて、蜚の濡衣をかりとりて、女の朝ゐしたりけるふしどに、是をぬき、せて、さらぬやうにて置たりしに、かねて心を合せる海人來りて、娘ごの我衣をとらせ侍ふぞと、さも心なき蜚衣、ひとへになき名をいひ付たり。則、盗人の事なれば、父、是を聞付て、世の聞へ見ぐるしとて、娘をやがて殺しけり。其後、かのむすめ、父が夢にみへつ、一首ぬき着するそのたばかりの濡衣はながき涙のためしなりけり  
といひ捨て、さめぐと泣と思へば、夢さめぬ。しかあれど、父是をとりあげざりければ、又の夜

濡衣の袖よりつたふしづくこそなき名たつ身の涙  
なりけり

かくありければ、父驚きて、母をもうしなひ、②娘の供養にとて、博多の七堂を建立したりと云。それよりなき名おひたるを、蜚のぬれ衣とはいふなり。七堂、此時に建しといふはいぶかしけれども、いひ傳へ侍れば、記す也云々。

**C** 又按、一条禅閣の歌林良材、北村季吟の大和物語抄、長頭丸の説にも、濡衣の事、たゞしき出所みへぬよし侍り、此輩はさばかりの博覧なりしかども、たまさかにかうがへのこされしにや。

**D** 近年福岡の商人、聖福寺中町の石橋に(聖福寺十境の内、通津橋、則此所なり) つまづき倒れしが、其後、夢の告ありとて、彼橋石をほり返し見るに、尺餘の方なる石に、梵字あり、所の者、濡衣の古墳也とて、香花を供す。本文の説と合わせ見るべし。一説に佐野近世が館は、今の浜口町の返にありしと云、不審。

『石城志』卷五(佛事下)

四種の「濡れ衣」説話が記されており、それを私に内容に応

じて「A」も「D」として分類した。

まず、「A」についてである。「A」は中略しているが、『続風土記』と同じ「濡れ衣」説話を記していることを表す。

次に四角枠で囲んだ「B」についてである。点線で示したように「吉田重昌等が著せる江海風帆草にしろせるは」として、「A」とは少し異なった内容を記している。まず①にある「筑前守平の定ぶん」という名は、慶應義塾大学図書館蔵『伊勢物語註』や書陵部蔵『伊勢物語抄』などの勢語注に見られる父の名である。そして、『続風土記』などに見られる「濡れ衣」説話を記しながら、傍線部②にあるように「博多の七堂を建立した」とする。太字で示した『江海風帆草』であるが、宝永元年の識語を持つ航海記である。『国書総目録』によると、五本の写本の所在が知られ、活字本として『続々群書類従』に収められているとある。今回全ての伝本の内容を確認することができたが、本により立項の有無の違いはあるものの、「濡れ衣」に関し記された内容は『続風土記』とほぼ同じだった。

次に「C」では、諸書の古典注釈書などに見られる「濡れ衣」説話について記し、「D」では、濡衣塚の塚の由来の異説と娘の父の館について記す。

「D」の伝承の出所などは辿れなかったが、『石城志』が記

された当時は、このように、濡衣塚に纏わる様々な言説があったと思われる。中山平次郎氏は「此濡衣伝説は昔の人に余程強い印象を与へたと見えて、博多古図にはなくてはならぬ名所となり大抵の古図に掲げてある。」と指摘する。<sup>(注7)</sup> また、『石城志』巻十二「今俗所謂博多八景」では「濡衣夜雨 箱崎晴風 分杉秋月 奈多落雁 博多帰風 横岳晚鐘 竈山暮雪 名嶋夕照」とあり、八景の最初に濡衣塚が挙げられている。<sup>(注8)</sup> これらのことを考え合わせると、濡衣塚やそれに纏わる「濡れ衣」説話は、当時の博多において、『続風土記』などの影響から一定の定型化をもって記されるが、その一方で、色々な巷説もあったと言えるだろう。そのことは、次に掲げる九州大学文学部図書館蔵『博多之記』からも見て取ることができる。

#### 四、九州大学文学部蔵『博多之記』について

九州大学文学部蔵『博多之記』（国史／4D／62）は、享保十七年までの博多について記された書物である。若干の記述の違いはあるが、それとほぼ同じ内容を記したものが、福岡県立図書館に『筑陽博多記』と表題を付され所蔵されている。本稿においては、九州大学文学部図書館蔵『博多之記』

を用いた。『博多之記』に記される「濡れ衣」説話の内容は、以下の通りである。

一、濡衣霊社（石堂口橋側／松原の内に有り）、（中略）  
早良郡残の嶋にぬれ衣の瀬と申すて女の屍流。かゝりし所と■。

中略した箇所には、『続風土記』などに記される「濡れ衣」説話と同様の内容が記される。■は虫損のため、判読不能であることを示す。傍線を付したように、娘の死体が早良郡の「残の嶋（現在の能古島）」に流れ着いたとある。近世期、残の嶋は、廻船業により浦が発達していた。<sup>(注9)</sup> 具体的には、江戸初期、福岡城をはじめとする城の築城のための石の産地であり、その石は江戸や名古屋・大阪などにも運ばれた。その後、残の嶋浦は五ヶ浦廻船の根拠地の一つとして繁栄していく。当時の濡衣塚は、近松門左衛門作の浄瑠璃「博多小女郎波枕」の舞台である柳町とともに、遊郭として栄えていた新茶屋の入り口にあったことが知られている。さらに、濡衣塚は玄武岩で出来ており、「残の嶋」も玄武岩の産地として有名であった。想像の域を脱し得ないが、この残の嶋に娘の遺体が流れ着いたとする伝承は、博多の遊郭で遊んでいた廻船の船員達

によりもたらされたものであろうか。さらに、そのような遊郭の中で、様々な伝聞を含みつつ「濡れ衣」説話が享受されていたとも考えられるだろう。しかしながら、『早良郡志』や現在の能古島の地図・古跡を記した観光案内パンフレットなどを見ても、「濡れ衣」説話に関する伝承を見出すことは出来なかった。

だが、このことから、当時の博多には、諸書に記されるより多くの「濡れ衣」説話に関する言説が享受されていたことが想像される。

## 五、石堂丸物語との交響

「濡れ衣」説話は、さらに石堂丸誕生の話とも交わっている。寛延二（一七四九）年刊『荊萱道心行状記』<sup>(注10)</sup>には、以下のように石堂丸誕生の様子を記す。

（加藤繁昌は）己に四十有餘まで未だ嗣子なき事を憂へ、同国香椎の宮に詣で丹誠を抽で祈ける。抑、筑前國香椎の宮と申奉るは、当国糟屋郡に鎮座まし／＼異国の仇を防ぎ守らせをします。人王五十五代の姫帝神功皇后の御社なり。仲哀天皇此地に於て崩御まし／＼ければ、其

棺を椎の木に掛しに、異香薫じたりしかば、其木を香椎と名付けたり。今も其種を植つゝけて神木とせり。皇后異賊を征し玉ひし時、此より御旗をすゝめ玉ひし事、日本紀に詳なり。かゝる尊き宮居なれば、などか靈験なからんや。十七日參籠せし。滿散の曉白衣の神人枕上に立、吾は此当社の御使なり。汝じ領内を始めとして、國中の凶徒を平げ、民安く波靜なるも、皆是汝が心づくしの、海山の幸多かる。此の春のゆたかさ、祈らずとも、いかで守たまはざらん。①今後嗣の子を授け玉ふ。宮崎の松原の西の橋きは、博多の東、石堂口の川の邊に至るべし。彼の處に温潤にして、玉の如き石あるべし。其石をたづさへ歸つて、妻女に與へよ。必ず男子生ずべしと。あらたなる靈夢を感じ、直に石堂川口に馳行、此處彼所と尋ぬれど、更に靈夢の如き石もなし。然れども神の告なり。何ぞ其験なからんやと、普尋求る處に、何れの代何れの人の造立ともさだかならず。最舊たる石佛の地藏一體まします。立ちよりて見るに、左の御手に如意宝珠の形あるべきを、さはなくして鶏卵の如き、圓石ありて掌のせ玉へり。疑なく此石ならんと、取つてみれば果して告にたがはず、温なる事人肌の如く、光明かくやくとして、あたりを射る。(中略)②翌年長承改元の年、正月二十四

日の曉、男子を産す。(中略)③件の靈石を得たりし地の名を以て、幼名として、石堂丸と稱す。

(卷一「加藤繁昌後嗣を祈る」)

傍線部①には、『続風土記』などに見られる、濡れ衣を着せて殺された娘の供養塔と同じと言つても過言ではない所に石があり、そしてその石を抱き、傍線部②のように男の子が生まれ、傍線部③に「石堂丸」と名付けたとする。さらに、次に挙げた卷三では、濡衣塚を「石堂丸の父が尋ねるシーンも描かれる。

名所舊跡、問玉はずとも知玉ふべけれども、汝等を知るべからず、語て聞せんとするぞ。此あたり近き、聖福寺の西門の邊に、古墳一堆あり。あれこそ濡衣の女が塚なり。されば濡衣の女と云は、往古聖武天皇の御宇、佐野の近世と云し人(中略・『続風土記』と同様の「濡れ衣」説話が記される)此二首の歌を語り傳へ、世の人あはれみて、彼女の塚に種々の手向して、なき跡を吊ひしが、今代遠く舊たれば、其故をだに知る者なく、年々春の草生ぬるのみ。

(卷三「繁氏國中の舊跡を語る 附濡衣の女の事」)

これについて中山平次郎氏は、「此昔話のみならず、石堂川を遡ると菫萱の関があり、又川を下ると石堂丸の古跡があり、石堂川下流の返から小説的伝説が発散したやうに思はれ、濡衣塚建立講元二十七人及何安といふ人のうちに伝説作者が居るか、或は何かの關係があるとなると面白いが、それが判らないであらうか。」と指摘する。<sup>(注15)</sup> また弓削淳一氏は、次のよう<sup>(注16)</sup>に述べる。

この説話は、実は『菫萱道心行状記』卷之三「繁氏國中の舊跡を語る 附濡衣の女の事」にもある。物語中、女の嫉妬の恐ろしさ・世の無常を感じた繁氏の出家遁世のきっかけになった重要な役割を果たす。これは『筑前名寄』や『筑前国統風土記』を参考に挿入されたものと考えられる。『筑前名寄』は元禄四(一六九二)年成立。『筑前国統風土記』は宝永七(一七一〇)年の成立である。『石堂』については、『筑前名寄』には「箱崎松原の西の橋ぎは、博多の東、石堂江の川の返なる小池の内<sup>(注17)</sup>に在」とあり、『筑前国統風土記』には、前述のように「石堂」の項があり、『菫萱道心行状記』の作者はやはりこれらの記述を見て、筑前博多に「石堂」という聖地があることに気付き、この「石堂丸誕生の説話」を創作したのでは

なからうか。

石堂丸に関して、これまで見てきた近世の地誌類では、菫萱関については石堂丸の話が記されるが、博多の「石堂」の項目において、石堂丸について触れる記述はなかった。また、古地図においては、明和二年以降に作成されたとする「博多往古図」と、住吉神社蔵「博多古図」の二本が石堂丸の出生地を描く。<sup>(注18)</sup> 筑土鈴寛は「かるかや考」において、石堂及び博多七堂について「博多に宋人建立するところの百堂の旧跡に、榮西、聖福寺を造営したと地誌の記すところであるが、この百堂は各所に数百の堂があつて、その名なのであつたが、究めて見ないが、今博多の町名に普賢堂、辻堂、石堂、沖の堂、脇堂、瓦堂の七堂あつて、地名辞典に往古佛堂なりしにやと云つてゐるが、百堂も亦是等の堂の類であつたと思はれる。」と記している。最近になると、この博多七堂は、豊臣秀吉の太閤町割と合わせて紹介されている。<sup>(注19)</sup>

これらのことを考え合わせると、石堂丸の出生譚は、「濡れ衣」説話ほど知られていなかったと思われる。恐らく「博多七堂」にまつわる言説、そこに濡れ衣を着せて殺された娘の供養として建立された「七堂」をはじめ、「石堂」という地名に引きつけられるように石堂丸の出生譚が結びつき、さら

に、最近では太閤町割と博多七堂までもが結びついて、それぞれに語られる、また伝承される場に応じて彩られ、現在に伝えられてきたのではないだろうか。

## 六、近代以降の「濡れ衣」説話

最後に、近代以降の「濡れ衣」説話の展開について確認する。

明治に入り『筑前旧志略』<sup>(注16)</sup>や『石城遺聞』<sup>(注17)</sup>などの地誌類も出版されたが、『筑前旧志略』は『続風土記』の「濡れ衣」説話の内容によっており、『石城遺聞』は、「濡れ衣」説話自体を記していなかった。佐々木慈寛氏は、明治三十年に町内の有志の寄付金によって、濡衣塚を瓦ぶきのお堂に収めて祀ったことなどを伝える。そして、塚の横の大師堂には老琵琶僧が住み、通夜堂には奉仕者が住み、集会や浄瑠璃会が催されていたようで、夏祭りも行われていたようだ。

このように、近代以降も地元の人々から大切に守られてきた「濡れ衣」説話は、明治期から作られた「福岡市街地図」の裏に、「市街名勝案内」としても紹介されるようになる。

表一

### 【記号の説明】

○：「濡れ衣」説話（濡衣塚）に関連する記述があるもの  
 ×：「濡れ衣」説話（濡衣塚）に関連する記述がないもの

記号	年	備考
○	明治四十一年	
○	大正三年	
○	大正八年	
○	大正十五年	
○	昭和四年	
○	昭和九年	
×	昭和四年	「市内郊外の名勝案内」として、東公園・西公園をはじめ、主な神社・仏閣を中心に福岡国際飛行場（この年、東京―福岡間の定期輸送が始まる）などが紹介されている
×	昭和十一年	市内電車の路線図など、交通機関の案内が中心となる（この年、博多築港大博覧会が開催され、福岡老舗デパート岩田屋も開店した）
×	昭和十二年	「福岡新名所有力商品一覽表」として、宣伝広告が記される
×	昭和十五年	主に、デパートや娯楽施設の案内が記される

しかし表一より、時代の変遷とともに、徐々にその名も消えていったことがわかる。

また、「濡れ衣」説話は、ふるさとの伝承として各種の本に収録されるようになる。そして、その中で、娘の名が「春姫」と付けられるようになる。そこで表二では、記述内容に応じてA・a・B・bの記号を用いて分類した。

表二

【記号の説明】

- A、『筑前国統風土記』の記述に基づくもの
- a、『筑前国統風土記』に基づきながら、娘の名を「春姫」とするもの
- B、『石城志』の記述（博多七堂の建立）に基づくもの
- b、『石城志』の記述（博多七堂の建立）に基づきながら、娘の名を「春姫」とするもの
- ①…『博多之記』に記される、能古島に娘の遺体が流れ着いたという記述のあるもの。
- ②…娘が濡れた衣を着て寝ていた理由を、海人から盗んだとせず、義母が、「娘が義母を呪うため、俄雨の中、妙見堂で祈願していたのを見た」と海人に言わせた」としているもの。

記号	年号	書名など
① B	大正二年	『伝説の九州 筑前之巻』竹田秋樓、積善館支店
B	昭和三年	『福岡史要』永島芳郎、福岡市教育支会
② b	昭和七年	『趣味の博多（大福岡市巡杖）』郷土の歴史を語る会編、福岡協和会
② b	昭和十一年	『筑前の伝説』佐々木慈寛編、九州土俗研究会編
B	昭和十一年	『福岡市郷土教育資料』福岡市教育会編
b	昭和十三年	『筑前博多（附名所旧跡 郊外案内）』福岡協和会
② b	昭和三十二年	『博多』福岡市観光課編、福岡市観光協会
② b	昭和四十年	『史蹟と伝説』福岡市観光課
b	昭和四十七年	『郷土のものがたり』福岡県
b	昭和四十八年	『福岡市の史話と観光』福岡市観光編
b	昭和五十三年	『史蹟伝説を尋ねて 福岡篇』宮部末吉（非売品）
b	昭和五十四年	『日本の伝説 33福岡の伝説』角川書店
b	昭和五十五年	『筑前の古寺めぐり』安川静生、みどりや仏壇店書籍部
b	昭和六十年	『息吹く博多の史蹟——その歴史と伝説探訪』後藤光秀、アドアサヒ・アサヒ編集室
A	昭和六十二年	『博多郷土史事典』井上精三、葦書房
b	昭和六十二年	『ふるさとの伝説——いつでも伝えたい三十一話——』安川静生、あらしき書店

b	昭和六十三年	『よかとこ博多読本』筑紫の歴史を学ぶ会
b	平成六年	『福岡歴史百景』後藤光秀、葦書房
b	平成二十一年	『福岡歴史がめ煮（博多区・中央区編）』空閑龍一氏、海鳥社

これらの比較結果から、最近では圧倒的に、「b」の娘を甬うために七堂を建立したとする『石城志』の内容に、「春姫」という名を付けたものが好まれていることがわかる。そこで、現在一般的に知られる「濡れ衣」説話を以下に示した。

博多と箱崎とをへだてる「石堂川（御笠川）」の東岸、石堂橋のほとりに梵字を刻み込んだ濡衣塚がある。奈良時代、聖武天皇（七二四〜七四九まで在位）のころ、佐野近世という人が筑前の守護として下ってきたが、都から連れてきた妻を失い、この土地で後妻をめとった。先妻との間に春姫という娘がいたが、継母はこの娘を憎み、亡きものにしてしようと企んだ。そして、漁夫に金品を与えて偽りの訴えをさせた。「都の姫君が夜になるとわがもとに通われ、釣衣を盗んで行きます。お返しください」といふ漁夫の声に、近世は驚いて春姫の寝所をのぞいて見ると、濡れた衣を被りながら眠っていた。濡れた釣衣

は継母が眠っている娘に着せかけたものであったが、後妻の悪計と気づかなかった近世は、春姫のいいわけを聞くともせず斬り殺した。

その年が暮れ、ある夜のこと春姫が父の夢枕に立って二首の歌を詠んだ。

濡衣の袖よりつたふ涙こそ永き世までの無き名なり  
けり

ぬぎ着するそのたばかりのぬれ衣は永き浮名のため  
しなりけり

近世は夢から覚めて春姫の無実気がついた。不明を悔い、妻を離別し、肥前松浦山に入って出家した。後に松浦上人と呼ばれる名僧になったという。一説によると、佐野近世は娘の供養のため、石堂・萱堂・奥ノ堂・普賢堂・瓦堂、脇堂、辻ノ堂の七堂を建てたとも伝えられ、七つの堂の名はいまも博多に地名として残っている。

『日本の伝説 33 福岡の伝説』  
（角川書店、昭和五十四年）

## 七、まとめ

以上をまとめると、博多における「濡れ衣」説話は、貝原益軒が、「濡衣塚」と「博多七堂」、「太閤町割」など、それぞれを区別しシンプルな形で記したことで、その後の地誌類もそれを踏襲し定型化して記すが、しかし、一方では『石城志』や『博多之記』などの記述から、近世期の博多では、様々な言説が結びつき語られていたことが想像される。そして近代に入り、益軒の影響が薄らいだのか、『石城志』の内容に、娘の名を「春姫」と名付けたものが好まれるようになる。そして、「博多七堂」や「石堂」という地名に関わる言説や由来と合わせて、石堂丸の出生譚や太閤町割までもが結びついていった。

すなわち、博多に於ける「濡れ衣」説話の展開は、前稿で指摘したように、古典注釈に記される「濡れ衣」説話に、聖福寺の接待講衆に纏わる板碑と結びつき語られるようになった。その背景として、海に近い場所であることや、博多の人々にとってこの地は博多の周縁であり、霊地・墓場という境界のイメージや、「濡れ衣」説話が結びつきやすい土地の属性のあったことが考えられる。そして、博多における「濡れ

衣」説話は、益軒の記述により地誌類の中では一定の定型化を見るが、その一方では、「博多七堂」や「石堂」という地名と臨機応変に結びつき、現代まで大切に語り継がれてきたのだと思う。

注

注1 大島由紀夫氏「濡れ衣」説話の展開「学習院大学国語国文学会誌」第三号（一九八八年）

注2 拙稿「博多における「濡れ衣」説話——在地の伝承性——」『昔話——研究と資料——』第三九号（二〇一一年三月）

注3 引用本文は、『筑前國續風土記』（貝原益軒編、伊藤尾四郎校訂、二〇〇一年、文献出版）による。なお『福岡縣史資料 續第四輯（地誌編一）』（一九四三年、福岡県）も参照した。

注4 昭和八年に福岡県立図書館より発行。引用は昭和五十一年に文献出版より復刻されたものを用いた。

注5 この分類には、安見有定の『筑陽記』（宝永二年・一七〇五年）の記述（濡衣旧跡 石堂橋の北、宮崎松原の端に小池の中嶋に石塔有。是佐野近世女の墓也と云へり）に見られるような、益軒の記述が直接の影響というわけでもなくとも、益軒の記した内容と同様のものにも、○を付けている。

注6 本文の引用は、楡垣元吉監修『石城志』（巻一―六、一九七七年、中央公論社）による。

注7 中山平次郎氏「博多古図」（『古代乃博多』岡崎敬校訂、九州大学出版会、一九八四年）

注8 『石城志』では、「七堂」の項目では、「濡れ衣」説話に関して触れられていない。ちなみに「七堂」については、次のように

記述されている。

七小路 一小路 中小路 金屋小路 奥小路 古小路

濱小路 對馬小路

七厨子 奥堂厨子 普賢堂厨子 瓦堂厨子 萱堂厨子

脇堂厨子 (金屋町を云) 観音堂厨子 (赤町を云) 文珠堂厨子 (片土居町を云)

七堂 右七厨子の内、観音堂・文珠堂を除て、辻堂・石堂を加へて、是を七堂と云

七口 濱口 象口 龍口 川口 堀口 蓮池口 渡唐口

七流 呉服町流 東町流 西町流 土居流 須崎流

石堂流 魚町流

七観音 大乘寺 妙音寺 観音寺 龍宮寺 聖福寺

乳峯寺 東長寺 右の寺に在、其寺條に詳也

又、里俗の説に、博多の町の縦横は、七條の袈姿に表せりと云

注9 以下、能古島に関しては『福岡県史 通史編福岡藩(一)』第四編第六章「近世前期の浦と海運」(西日本文化協会編、福岡県、一九九八年)、『早良郡志 全』(福岡県早良郡役所編、名著出版、一九七三年)などを参照した。

注10 『福岡市の板碑』『福岡市の板碑(図版)』(一九九二年、福岡市教育委員会)

注11 引用本文は、『佛教各宗續高僧實傳』(一九〇三年、博文館)所収「苺萱道心行状記」による。

注12 中山平次郎氏「博多古図」(『古代乃博多』岡崎敬校訂、九州大学出版会、一九八四年)

注13 弓削淳一氏「苺萱・石堂丸物語」とその伝説」(『九州民俗学』

第三号、九州民俗学会、二〇〇五年) 第四節・六「濡衣説話と「苺萱・石堂丸物語」

注14 福岡県立図書館HP「福岡県の近世絵図」(本稿執筆時、<http://www.lib.pref.fukuoka.jp/hp/toshu/kindai/index.htm>) 及び九州大学デジタルアーカイブ「福岡・博多の史料」(本稿執筆時、<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/Gallery.files/hakata.html>)を参考にした。

注15 博多祇園山笠公式HPなどでも「大陸貿易で栄えた博多は戦国時代、せめぎ合う大名、豪族の争奪の場となり、兵火に遭って焼け野原と化した。天正十五(一五八七)年、その復興を命じたのが太閤秀吉で、「太閤町割り」あるいは「博多町割り」と呼ばれる。当時も奇数の七は縁起がいいとされ、流も七つと決められた(「七流」のほか「七小路」「七堂」「七番」といった言い方もある。)」と説明されている。

注16 本文は、『筑前史料叢書 上巻』「筑前旧志略」(歴史図書社、一九七八年)を参考にした。

注17 本文は、『石城遺聞』山崎藤四郎編(名著出版、一九七三年)を参考にした。

注18 『濡衣塚の伝説と古跡』(佐々木慈寛氏、福岡県文化会館、一九六七年)

【付記】 本稿は、平成二十三年度九州大学国語国文学会での発表をもとに成したものである。席上並びに様々な場面で多くの御教授を賜りました諸先生方に、深謝申し上げます。また、博多における「濡れ衣」説話については、太宰府市教育委員長の他、福岡市民の祭り振興会実行委員、博多仁和加振興委員会常任理事、博多那能津会会長などを務め、現在、福岡県観光アドバイザー

ザーであり福岡市イベントアドバイザーでもある岡部定一郎氏に、貴重な御教示を多く賜りました。記して御礼申し上げます。

(もり さとこ・九州産業大学専任講師)